くすり博物館だより

VOL. 64
2010年(平成22年)10月

NAITO MUSEUM OF PHARMACEUTICAL SCIENCE AND INDUSTRY

内藤記念くすり博物館
〒501-6195 岐阜県各務原市川島竹早町1
Tel:(0586)89-2101 Fax:(0586)89-2197
http://www.eisai.co.jp/museum/

特集 常設展の魅力

生薬 中国医学では動植鉱物を加工して薬の原料(生薬)とした。このコーナーでは一角(イッカク：鯨の仲間の歯)や蝉退(ぜんたい：蝉の抜け殻)など珍しい生薬を見られる。

博物館の展示には常設展と企画展の２種類があります。常設展はその博物館の収蔵資料を展示するもので、企画展はテーマに沿って普段常設展では展示していない資料を中心に展示するものです。内藤記念くすり博物館では毎年１回企画展を開催しており、ご好評をいただいています。実は常設展にも素晴らしい資料や図書が展示されています。

当博物館の常設展の特長は、ここに来れば日本の薬の歴史や文化に関する資料をまとめて見られるということです。また薬草園と図書館を併設しているため、たとえば薬草園で漢方薬の原料となる薬草を探し、さらに図書館でその薬草の効能を学んだ後、常設展で実際に薬を作る製薬道具を見る、というような利用方法も可能です。

2010年１月には当博物館の常設展をリニューアルいたしました。展示館に入ると、医薬の歴史にそって、貴重な資料や図書が解説付きで並べられています。

日本では古来、中国や韓国から東洋医学を学び、江戸時代には国内で薬の製造や販売が行われるようになりました。また長く続いた鎖国時代にあっても、ポルトガルやオランダを通じて海外の医学・薬学を学ぼうとしてきました。幕末になると諸外国との交流が深まりました。近代ヨーロッパでは植物から抽出された薬やワクチン、合成された医薬品が創製されるようになり、やがてそれは日本にももたらされました。

このような医薬の歴史や文化的背景を知る機会はなかなかありません。薬は日常的によく使うものですが、くすり博物館の常設展を見ていただくことで、その歴史の流れをつかみ、現在の医薬の基礎となった昔の人々の努力に思いを馳せていただければ幸いです。

『解体新書』
杉田玄白らが翻訳した西洋の解剖書。蘭方医学の展示コーナーではその実物が見られる。

行商用薬箱
江戸時代には行商人が薬を売り歩くこともあった。現在では見られない風俗を紹介している。

常設展は10のコーナーに分かれ、それぞれのテーマに沿って貴重な資料を展示しています。

健康への願い

白沢（はくたく）
江戸時代、病気の魔除けとしての信仰の対象にもなった。

健康で長寿を全うしたい。それは人類の永遠の願いです。昔の人々は病気から身を守り、健やかに暮らすために、神仏に祈願したり魔除けやまじないに頼ったりしました。現在でも私たちは健康祈願の祭りを行ったり、絵馬を奉納したりします。

≪展示資料≫
病魔よけの神獣・白沢、健康祈願のお守り、病気平癒の絵馬など。

医療のあけぼの

人類は、薬になるものや病を治す方法を経験から学びました。日本を含む東アジアでは、古代中国の文明と共に誕生した東洋医学の影響を受けました。東洋医学では人体の内側から治すための本草学と漢方薬、外側から治すための鍼灸（しんきゅう）が広まりました。

≪展示資料≫
動物性・植物性・鉱物性の生薬（しょうやく）、中国の医薬神・神農像（しんのう）、中国医学の古典『黄帝内経』『神農本草経』『傷寒論（しょうかんろん）』、薬を煎じる薬缶（やかん）など。

経絡（けいらく）人形
鍼灸を学ぶ人たちは、体をめぐる経絡と経穴（＝ツボ）を学ぶために、重要な経穴を記入した人形を用いた。

犀角（さいかく）と犀角器
クロサイの角は解熱・解毒の生薬として用いられた。犀角で作った酒器にも解毒作用があると考えられていた。

くすりを作る

薬研（やげん）
舟形の台座の中で円盤を前後させて、生薬を押し砕く道具。

昔は、野山に生える草木をそのままなめたり、煎じて飲んだり、草木の汁を体につけて薬としました。その後、医学・薬学の発達に伴い、丸薬や散剤などの剤形も工夫され、製薬道具もいろいろ考案され、効率よく生産されるようになりました。

≪展示資料≫
江戸時代の薬研、石臼（いしうす）、ふるい、扇形製丸器（せんけいせいがんき）、押し出し式製丸器、丸薬計数さじなど。

くすりを商う

江戸時代には、神社仏閣の門前町や大都市に薬屋ができ、さまざまな薬が販売されるようになりました。店には看板が掲げられ、木版多色刷りの美しい錦絵広告やちらしも配られました。薬が店舗の販売だけに限らず、行商人が売り歩くことも多かったようです。また、配置売薬も始まりました。

≪展示資料≫
薬の番付広告、行商人の薬箱、富山の配置売薬の背負行李（せおいごおり）、明治時代の仁丹や征露丸の看板、明治中期の薬屋の再現など。

配置売薬の背負行李
配置売薬の行商人は新しい薬から土産用の紙風船まで五段の行李に詰めてかついだ。

蘭方医学の伝来

『解体新書』
体の仕組みを紹介した文章に加えて、木版刷りの解剖図も多数掲載されている。

鎖国令によって、海外との交流が途絶えたわが国では、長崎出島の商館に出入りする通訳によってのみヨーロッパの文化が紹介されました。その中にあってオランダから入ってきた蘭方医学は、中国医学一辺倒だったそれまでのわが国の医学に新しい風を吹き込みました。

≪展示資料≫
『解体新書』や『瘍科全書』など江戸後期に出版された西洋医学書、陶製蒸留器・らんびき、華岡青洲の手術道具と手術図、宮崎彧解剖図、江馬蘭斎の蒸気風呂など。

彩る

お歯黒の道具
五倍子（＝ヌルデの虫こぶ）の粉と鉄漿（＝鉄釘などを漬けた酢など）を混ぜたものをお歯黒といい、歯に塗った。

昔の人は、病気をもたらす悪い悪霊を寄せつけないように、顔に草木の汁を塗って色をつけたり、体に強い匂いをつけました。これが化粧の始まりです。その後魔除けのためから美しく飾るための化粧へと変遷していきました。紅花から口紅を作ったり、鉛や水銀の白粉のように天然物を原料としました。

≪展示資料≫
江戸時代の化粧道具、歯を磨くのに用いた総楊枝、お歯黒とそれをつけるための道具類など。

くすり入れ

往診用薬箱
正面の扉を開けると、扉の内側にも引き出しがある造りの薬箱。

江戸中期には都市や街道が整備され、流通経済圏の拡大によって薬業も大いに発展しました。すぐれた売薬が各地で作られ、それに伴い、くすりの入れ物も目的に応じてさまざまな形態が生み出されました。また、庶民でも医師の診察を受けることができるようになり、往診も行われました。

≪展示資料≫
携帯用薬入れの印籠や巾着、医師用の往診用薬箱など。

はかる

さお秤
秤の皿には検定を受けたしるしの刻印が押されている。ひょうたん型のケースに入れて持ち運んだ。

くすりは、量によっては毒にも薬にもなります。“さじ加減”という言葉があるように、飲む人や薬の種類によって、量を加減することが大切です。薬の分野だけでなく、“はかる”ことは私たちの日常生活とも深く関わりがあります。度量衡の道具は時代や目的に応じてさまざまな種類のものが考案されました。

≪展示資料≫
江戸時代に薬をはかるのに用いられたさお秤、高貴な人が香をはかるのに用いた香具秤など。

海外コレクション

スペインの薬壷
瓶には中身の薬品の原料である植物の絵が描かれている。わかりやすく美しい容器である。

薬の入れ物には、世界各地で使われていた乳棒や乳鉢に加え、美しいガラスの薬瓶や磁器に絵付けされた薬壷など日本の道具とは異なる珍しいものがあります。国内で使われていたものと比較することで文化の違いがわかります。

≪展示資料≫
乳鉢・乳棒、薬瓶、世界最古の処方箋が書かれたクレイタブレット（複製）。

近代の医療

セイヨウナツユキソウの花とアスピリン
この植物から抽出したサリチル酸からアセチルサリチル酸が作られ、解熱・鎮痛薬アスピリンとなった。

近代の薬は、植物などの天然物からの成分の抽出・分離に始まり、ワクチンの開発、化学合成による化学療法剤の創製へと発展していきました。そして多くの人の命が救われ、薬は人類に対して大きな貢献を果たしました。家庭でも用いられる薬も数多く発売され、人々の病気や怪我の治療に欠かせないものとなりました。

≪展示資料≫
マラリアの薬・キニーネ、梅毒の薬・サルバルサン、国産のペニシリン・碧素、マクニンなどの虫下し薬や肝油、メンソレータムなどの戦前の製品など。

おくすり今昔

飲食養生鑑・房事養生鑑

この２枚組の錦絵は江戸時代後期の作とされ、体内の各器官の役割を紹介し、長命と子孫繁栄のために飲食と房事（ぼうじ：性行為）の乱れを戒める内容となっています。

「飲食養生鑑」は飲み食いする男性の体内が描かれています。冒頭の文章には「高貴な人も庶民も賢い人も愚かな人も腹に備える臓腑はこの通りです」と書かれています。ただ、描かれている内臓は実際の臓器とは異なり、中国医学の五臓六腑説に基づいたものとなっています。例えば、「腎」は泌尿器としてではなく、「精神の宿る命門」として扱われています。

絵の中では、小人が暴飲暴食の害と臓器の機能を説明しています。「心」には奉行らしき人がいて、体内の活動が滞りないようにする役目だが、体の持ち主は乱暴が多くて困るとぼやいています。へその所には、この辺りから出る金を「へそくり金」というなど、ユーモラスな説明も書かれています。

「房事養生鑑」は女性の体を題材に、過度の房事により有病短命の人が多いと戒めています。女性は遊女の姿で描かれています。そのため、「心」では来ない客を待ちわびる心情をもらしていますが、「飲食道」と書かれた食道の小人は、「客の前ではおとなしいが陰ではよく食べてくれるから忙しい」と嘆いています。

飲食養生鑑（左）・房事養生鑑（右）
作者不明だが、一説には歌川国貞（1786-1865）の作とされる。

なお中国の五臓六腑図には女性の生殖の仕組みは描かれていないため、特に女性の絵は『解体新書』以降の解剖書の影響を受けて作られたものではないかと考えられています。

展示室ではよく見えるように拡大した絵を展示していますので、じっくりとご覧ください。

（学芸員　稲垣裕美）

とぴっくす

■130万人目の来館者達成

当館では2010年５月２日に、1971年の開館以来の累計来館者数が130万人を突破しました。

130万人目となったのは岐阜市在住の尾野愛子様で、ご主人とともに来館されました。「博物館の薬草園で春の花を見たいと思い来ました。130万人目で驚いていますが嬉しい気持ちでいっぱいです」と喜んでいただけました。記念品として、陶製蒸留器・らんびきの置物と薬用植物の画集を贈呈いたしました。

（左より）永縄厚雄館長、尾野愛子様とご主人様

■薬草園フェスタと演奏会

５月15日の薬草園フェスタでは、薬草友の会のイベントコーナーに加え、アンサンブル・コンフォーコを迎えて弦楽器と木管楽器の演奏会を開催しました。

アンサンブル・コンフォーコは岐阜を中心に活動しており、今回は「となりのトトロ」から「カルメン」まで幅広いプログラムで演奏いただきました。

当日は1,224名の皆様にご来館いただきました。ありがとうございました。

演奏会の様子

◆◆資料･図書ご提供者ご芳名◆◆

川嶌眞人
小林公子
武田科学振興財団杏雨書屋
豊橋市医師会
本田鎮子
三好町教育委員会

～ありがとうございました～
（敬称略／五十音順）

内藤記念くすり博物館

開　　館	9:00-16:30
休　　館	月曜日･年末年始
館　　長	永縄厚雄
学 芸 員	稲垣裕美（編集担当）
学芸員･司書	野尻佳与子　伊藤恭子
庶　　務	森田麻起子 沼田望（見学受付） 田中康恵（見学受付）
薬用植物園（栽培管理）	苅谷辰行　亀谷芳明 石崎順弘